

標準解答

合 計	⑤				④				
	4	3	2	1	5	4	3	2	1
50 点	(計 8点)	3 点	2 点	1 点	2 点	3 点	2 点	1 点	(計 16点)
	ウ すえて 老いたる猿 老いた猿を思いやる猿たちの姿に感動して、 早く親に会いたいと思ったから。					オ (玲於奈が誘っても入部しなかったのに、) 瑛 太郎が現れた途端に入部した基を、玲於奈は 快く思っていないかったこと。 八つ当たり エ すれ違いがあったが、二人の目標が同じであ ることを再確認して安心したから。			○内容 自分が目指している、あるいは夢見ている 世界について、目指している世界、あるいは 夢見ている世界を実現するために必要なこと にふれながら明確に書いている。 ○表現 文脈に即して語句が適切に使われており、 内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わか りやすい文章になっている。 ○表記 漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切 に使われている。

解説

1 「見える」に「ない」をつけると「見えない」となる。「ない」の直前が工段音に変化したので、「見える」は下一段活用だとわかる。また、「見える」の直後に「虹」という名詞があることから、「見える」は連体形だとわかる。

3 問題文にもあるように、「楷書とは筆順が異なる」漢字を選ぶ。「荷」の部首であるくさかんむりは、行書体と楷書体で筆順が異なる部首である。

4 「毎年」は「マイとし」と読む言葉で、「毎」は音読み、「年」は訓読みである。アオの言葉の読み方は次のとおりである。なお、カタカナは音読みを、ひらがなは訓読みを表している。

ア 円高（エン だか） イ 煙突（エン トツ） ウ 困惑（コン ワク）
エ 出口（で ぐち） オ 野宿（の ジュク）

5 「きらきらと」は活用がなく、後にある「光る」という動詞を修飾しているので、副詞だとわかる。なお、副詞は自立語で活用がなく、主に連用修飾語になる単語である。

2 1 [] の直前にある「1」で○をつけた地域の魅力とは」に注目すると、【永田さんのアドバイス】は、「地域の魅力を教えてください」だけでは、2の質問は、1の質問と別の質問だと回答者が誤解するのではないかという内容だということに気づける。よって、[] には、「別の」等の言葉が入る。

2 [] の直前にある「日本の農業は高齢化の進行や農地の荒廃があつて」から、「決して[]とは言えない」は日本の農業がうまくいっていないことを表現したとばだとわかる。また、直後に「言えない」という否定表現があることから、[] にはうまくいっているという意味を持つ語が入ることがわかる。これらの条件にあうのは「順風満帆」である。なお、「順風満帆」は物事が順調に進むことである。

3 [] の直前にある「資料1」を見てもらえるかな、全国と比べ、熊本県の特徴は」や、あとの今村さんの発言中にある「だから、地元の野菜をおいしく食べてもらうために…」に注目する。【資料1】を見ると、熊本県の農業出荷額に占める野菜の割合が、全国のそれより高いことがわ

かる。

4 直前の「地産地消が進むとフード・マイレージの値は」に注目する。「地産地消」とは「ある地域で生産された様々な生産物や資源をその地域で消費すること」である。また、【資料2】に「フード・マイレージ」食料の輸送量×輸送距離」にも注目する。これらのことから考えると、地産地消を推進すると「食料の輸送距離」は短くなるので、もし、輸送量が同じであれば、フード・マイレージの値は「小さくなる」はずである。

5 傍線⑤の言う「共通点」とは、「石積みの話」と「地産地消の推進」の共通点である。佐藤さんの「環境に配慮した地産地消」、今村さんの「環境に与える影響を示すフード・マイレージ：地産地消の推進に活用できそうだ」、【資料3】中の「石積みは環境に負荷をかけない」から、ここで言う共通点とは「環境に負荷を減らす（環境に配慮する）」という点だとわかる。

3 1 I 「I 的な研究」とは「純粹にその動物を知りたくてやる研究」のことである。このことから、研究Aは、第1段落に登場する「基礎的な研究」のことだとわかる。

II 「II 的な研究」とは「その場その場で応急措置的に効果を出す研究」であり、「速報性を重視し、現実化を目指して」いる人たちが行う研究である。また、「II に起きている問題」とも重ねて考えると、II には「現実」が入ることがわかる。

2 脱論文の最初にある「大人になって」や「職」に注目して、元の位置を特定する。（イ）の直前に「職にあった三十数年」、「子どもや学生のころから」などの表現がある。

3 「ある生徒」は「ヨーロッパと日本における、野生動物と人との関係の違い」についてまとめている。よって、ヨーロッパと日本の対比に注目して、解答を作成するようにする。

A A に入るのはヨーロッパにおける野生動物と人との関係である。第4段落に「人々も野鳥の存在を認め、…必要以上に干渉しない」、第6段落に「公園や学校などの緑地にいる身近で害のない動物たちとの距離感」は、ヨーロッパで見た少し緩やかで穏やかな感じよいのではないかとあ

る。要するに、ヨーロッパにおける二者の関係は「おたがいの存在を認めあうような穏やかな」関係なのである。

B **B**に入るのは日本における野生動物と人との関係である。第5段落に「私たちは野生動物から敵愾心を感じ取り、おたがいの間に緊張感が生じる」とある。

4 筆者は「リスはリスで、人は人でそれぞれの目的に応じてキャンパスで生活・活動している。このくらいの距離感が、リスにとつても人にとつても心地よいのでは、と思う」と述べている。この部分を受けた内容になっている選択肢は才しかない。なお、イの「干渉をなくした方がよい」は、第4段落の「必要以上に干渉しない」とは異なる表現である。また、エの「野生動物と人との間に生じるさまざまな問題」は文章中に登場しない。

5 【採点の観点】

○ 内容

自分が目指している、あるいは夢見ている世界について、目指している世界、あるいは夢見ている世界を実現するために必要なことにふれながら明確に書かれている。

○ 表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

△解答例▽

私が目指している世界は、私たちがお互いに優しく合える世界です。普段、私たちは小さなことに怒ったり、不満に感じたり、相手をうらやんだりしています。このようなことが積み重なっていくと、他人との関係が悪化し、互いの気持ちが離れていくことになります。だから、私は寛容さを大切にして、いつでも機嫌よく人に接することが必要だと思います。

4 1 「そこに」① 入って行くわけにもいかなかった」は、基が玲於奈と話せなかった理由である。「すかずかと」は遠慮なしに近寄ったり入ったりする様子を表す言葉である。瑛太郎先生に抗議しようと持ちかけている

三年生が玲於奈の周りにいることに気づいた基は、彼女と話すのをためらったのである。なお、三年生が抗議しなかったのは、玲於奈に代わって基が部長になったことである。

2 「千学で吹奏楽やろうって（玲於奈が）誘ってくれたのに、拒否していたから」「瑛太郎先生が現れた瞬間、ころっと入部したから」などに注目する。長い間、玲於奈の吹奏楽部入部の誘いを断ってきた基が、瑛太郎先生が指導者として戻ってきたとたんに入部したことを、彼女は快く思っていなかったのである。そして、そのことに基は気づいていたのである。

3 玲於奈の「うるさい。ちよつとくらい八つ当たりさせてよ」に注目する。2の解説にもあるように、玲於奈は、基が吹奏楽部に入部したことについて思うところがあったのである。「八つ当たり」は自分の不機嫌な気持ちや怒りを関係のない人にぶつけることである。

4 傍線④とその直前にある「嫌だよ：その人から部長をやれつと言われて、投げ出せるはずがない」という基の発言に注目する。基はこのように言った瞬間、部長でなくなった玲於奈の心境を慮ったのである。このことを説明している選択肢はエである。なお、才は「自分の気持ちはどうなのか疑念を抱き始めた」の部分が間違いである。

5 基と玲於奈が「どちらともなく吐息をつくように笑った」理由を、このときの二人の心情とあわせて答える。また、それまでのあらすじをふまえて解答をつくるようにする。2、3、4の解説にもあるように、この場面の前半では、この二人の関係は少しぎくしくしていたことがわかる。しかし、「全日本コンクールに出場する」ことが二人に共通する目標だということを確認した基と玲於奈は、「吐息をつくように笑った」のである。「吐息」はがっかりしたり、ほっとしたりしたときにつく息（ため息）のこと、ここでは二人が「ほっとした」様子であることを表現している。

5 1 問題文にある「その場の状況の説明」にあたる部分は、「猿ども集まっていたが中に、藤かづらやうの物にて編みたる畚をすゑて、かはるかはるたちより、木の実などあたへなぐさむるさまなり（＝猿が集まっている中に、藤のつるのようなもので編んだかごに、代わる代わる木の実などを入れ慰労している様子であった）」である。この部分を説明している選択肢はウで

ある。

2 「ゑ」は「え」と読むので、「すゑて」は「すえて」となる。

3 傍線③の直前の「子ども」は「猿」のことであり、また、直後の「つかふる」は「仕ふる」と書く。要は、若い猿が年老いた猿に仕えている（子どもが世話をしている）のである。よって、「これ」は「老いたる猿」を指している。

4 問題文にもあるように、帰りを急ぐ気持ちになった理由とそのきっかけを答える。傍線④の直前に「みづからも親持ちたれば、ことさらに感じて（＝自分にも存命の親がいるため、（その様子に）ひどく感動し）」とある。この部分が「帰りを急ぐ気持ち」になったきっかけである。また、ここでの「帰る」は「親元に帰る」という意味である。よって、「帰りを急ぐ気持ち」になったのは、若い猿が年老いた猿に奉仕している姿を見た児島尚善が、自分も早く親に会いたいと思ったからである。

△大意▽

児島尚善が語られたことだが、「京都から丹波を経て、播磨に帰る山中で、向かっている先の所がざわざわとしていたので『何だろうか』と思って見てみると、猿が集まっている中に、藤のつるのようなもので編んだかごが置いてあり、それに代わる代わる木の実などを入れ慰労している様子であった。その内の方に、年老いた猿がちらっと見えた。（尚善は）若い猿たちが年老いた猿を世話していることに尚善はふと気づいて、自分にも存命の親がいるため、（その様子に）ひどく感動し、帰り道をさらに急がずにはいられなかった」そうだ。